



Data

監督・脚本：中島哲也
原作：澤村伊智『ぼぎわんが、来る』
(角川ホラー文庫刊)
出演：岡田准一／黒木華／小松菜奈
／青木崇高／柴田理恵／太
賀／志田愛珠／蜷川みほ
伊集院光／石田えり／松た
か子／妻夫木聡

■ショートコメント■

◆「こわいけど、面白いから、観てください。」をキャッチコピーにした中島哲也監督の最新作と聞き、こりゃ必見！中島監督の『パコと魔法の絵本』(08年)はイマイチだった(『シネマ20』246頁)が、『下妻物語』(04年)(『シネマ4』323頁)、『嫌われ松子の一生』(06年)(『シネマ10』360頁)、『告白』(10年)(『シネマ25』51頁)はすべて面白かった。もっとも、私は基本的にホラーは苦手だから、ホントは「最恐エンターテインメント。」と言われると腰が引けるのだが・・・。

◆冒頭から、“昭和を代表する気楽なサラリーマン”植木等の“平成版”かと思われるような会社員、田原秀樹を演じる妻夫木聡のテンションが高い。それに対して、新妻の田原香奈(黒木華)は秀樹の口やかましい親戚たちから“暗い”と言われているが、大丈夫？ 待望の赤ちゃん・知紗が生まれた後の、秀樹のイクメンパパぶりはさらにすごい。私の周りにもフェイスブックに夢中の人がチラホラいるが、秀樹レベルになると、まさにブログにアップすることが人生のすべてのようだ。しかし、トランプ大統領のツイッターは全世界の人々が注目しているのに対し、秀樹のブログをホントに見ている人は How many？

◆近時、貴乃花と花田景子夫人が、さらに及川光博と檀れいの離婚が報じられた。そのホントの離婚理由は外部にはわからないが、秀樹・香奈夫妻もブログ上の仲睦まじさとは裏腹に、かなりヤバそうだ。しかして、その原因は？

本作中盤は、オカルトライターの野崎(岡田准一)の下を秀樹が訪れるところからスタートする。秀樹は「最近身の回りで超常現象としか言いようのない怪異な出来事が相次いで起きている」と野崎に相談したわけだが、秀樹の友人の民俗学者・津田(青木崇高)の

説ではその何かとは、田原の故郷の民間伝承に由来する“ある化け物”らしい。

本作中盤では、子供時代の秀樹が女の子と一緒に遊んでいる時の不気味なシーンが登場するが、田舎にはどこにでも“人さらい”の伝説があるらしい。しかして、秀樹の故郷の“お山”には“あれ”が・・・？そして、“あれ”が“来る”と、かなりヤバイことに・・・。

◆野崎に続いて、本作には、①野崎が秀樹に紹介したキャノ嬢の霊媒師・真琴（小松菜奈）、②真琴の姉で、日本最強の霊媒師・琴子（松たか子）、③TVで有名なタレント霊媒師・逢坂（柴田理恵）というケツタイなキャラが次々と登場する。そして、それぞれケツタイな自説を展開するが、私はそこらあたりから少しずつ本作がバカバカしくなってくることに・・・。

『告白』では松たか子の熱演が光っていたが、あえて抑揚のないしゃべり方で通した本作での松たか子の演技はイマイチ。岡田准一も、『永遠の0』（13年）（『シネマ31』132頁）はもちろん、『海賊とよばれた男』（16年）（『シネマ39』68頁）、『関ヶ原』（17年）（『シネマ40』178頁）、『散り椿』（18年）で主演した時の演技に比べれば、本作ではおびえて逃げ回るだけの演技なのでアレレ・・・。柴田理恵に至っては、私には観る気もしないレベルだ。まあ、ワケのわからないホラーでは、こけおどしの演技とこけおどしの演出で物語をつなぐしか方法がないのかもしれないが・・・。

◆映画はクライマックスが重要。11月23日に観た『砂の器』（74年）の長い長いクライマックスは最高だったが、本作のクライマックスは関係者一同を集めた大規模なお祓いのシーンになる。プレスシートで中島監督は「映画の終盤には大掛かりなお祓いのシーンがあるので、見終わった人に『ああ、面白いライブを観たな』くらいに思ってもらえたらいいと思います。」と語っている。

たしかに、これはよく構成されたライブだが、一体何のためにやっているライブかわからないのが玉にキズ。イクメンパニックに徹していた秀樹の“嘘つきぶり”は中盤から明白になるし、一見良妻賢母のようだった香奈も、秀樹の長年の親友のようだった民俗学者・津田も、その邪悪な心の底や不倫ぶりがバラされてしまったが、これらの邪悪さは人間なら誰でも持っているものだ。お祓いでそれがすべて解決できれば問題はないが、そうは問屋がおろさないのでは・・・？

2018（平成30）年12月5日記